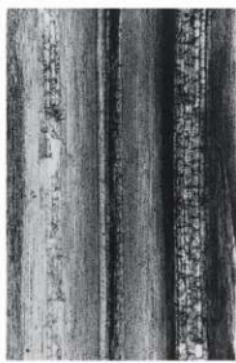




横断面×40

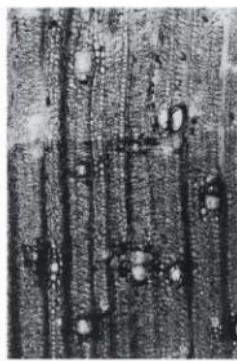


放射断面×40



接線断面×40

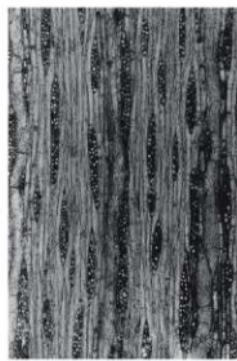
No-6B イネ科タケ亜科



木口×40



柾目×40



板目×40

No-7 クスノキ科ハマビワ属



木口×40



柾目×100



板目×40

No-8 クスノキ科クスノキ属クスノキ

第7節 フローテーション及び種実同定

本遺跡のSL1・SF1・SZ1の埋土について遺構の性格を判断する一助とするためにフローテーション作業を行った。なお、今回同定に至るまでの全ての作業を宮崎県埋蔵文化財センターで行った。

作業項目	作業の記録
①埋土サンプリング	SL1・SZ1：アルミホイルで包んだ移植ゴテを用いてベルトの床面付近の埋土を土のう袋に詰めた。SF1：遺構完掘の際、遺構中央部の埋土をバケツに詰めた。
②保管	土のう袋内に入れた状態で保管。平成19年4月から通気性のよい網状のコンテナで乾燥した。
③水洗作業	
対象埋土重量	SL1 135,900g SZ1 78,500g SF1 21,500g SF5 17,700g
作業日数	8日
延べ作業員数	17名
作業器具	フローテーション(2mm・1mm・0.45mmメッシュの篩を使用)
埋土土質	粘質土で水に溶けやすく、乾くと硬質になる。
④選別作業	10日間調査員1名で大まかに選別した後、実体顕微鏡を用いて細かく2次選別を行った。0.45mmメッシュ篩から採取した資料については全てを選別できなかったため、資料の中からアクリルケース1号分の資料をピックアップし、選別を行った。選別では、実体顕微鏡(Nikon・ネイチャースコープ・ファーブル)を用い、20倍の倍率で木片、種子、昆虫類、その他簡易な種別を行った。
⑤同定作業	
検鏡及び種選別	検鏡は、主に10~63倍まで行える実体顕微鏡(Nikon pxf)を用いて行った。同定は、「原色日本植物種子写真図鑑」及び遺跡から出土している原生植物との照合を参考に行つた(炭化種子の同定について、当センター職員黒木秀一に多くの協力を得た)。
撮影	調査員1名で4日間をかけて撮影を行つた。撮影は、顕微鏡にデジタルカメラ(Nikon D1X)を装着させ、NikonのCamera Control Proを使用して記録を行つた。

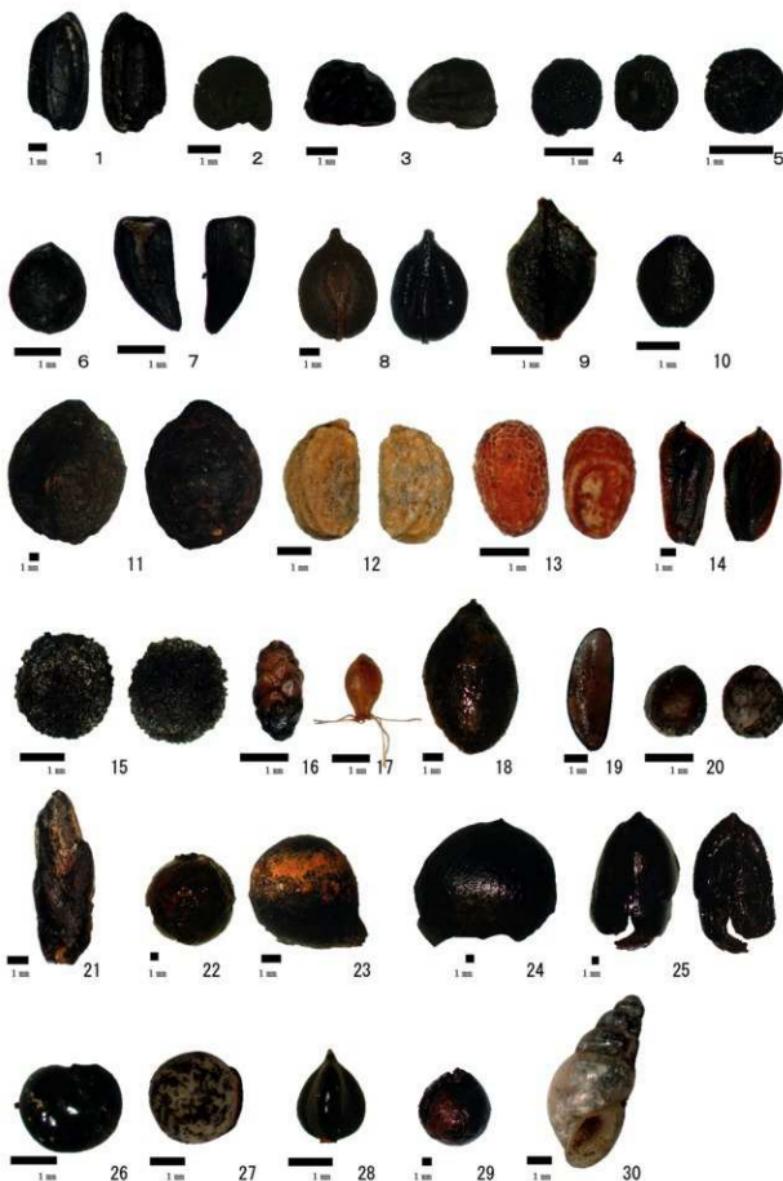
【作業結果】

フローテーションの結果、SL1からはイネ、SZ1からはエビヅル、ウメの他多数のスギの葉、SF5からはドングリ類の堅果や葉が確認された。これらの結果により、本遺跡における遺構の性格の認定や古環境復元について一定の情報を得ることができた。また、不明種子としか分類できなかったものは、自家同定による限界はあるが、写真撮影による記録作業等から今後の同定も可能となろう。ただし、遺構との共伴関係については、個体数の少ない資料ほどコンタミネーションの可能性が高く、今後年代測定等のクロスチェックが必要である。

曾井第2遺跡出土微細自然遺物一覧

出土 遺構	番 号	分類群		出土個体数			同定の根拠・出土遺物の特徴
		大別	細別(和名)	多	中	小	
SL 1	1	種子	イネ科 イネ	●			長さ 6mm幅 3mm厚さ 2mm程度の楕円形で、黒色を呈している。種子の形態や表面のきさの浅い凹部や胚乳の欠損からイネと判断した。
	2	不明種子1	-	●			長さ 5.2mm幅 2.3mm厚さ 1.2mm程度の楕円形で、黒色を呈している。薄肉質の表面形態で断面形は円形である。
	3	不明種子? 2	-	●			長さ 2mm幅 3mm厚さ 1.5mm程度の不定形の形態で、黒色を呈している。表面の凹凸が大きいが、表面は滑らかで輪廓方向の突起があらわれる。
	4	不明種子3	-	●			長さ 4.1mm幅 1.5mm程度の円形で、黒色を呈している。表面には細かい凹凸が向対あり、表面には大きな凹みがあらわれる。
	5	不明種子4	-	●			長さ 5.1mm幅 1.5mm程度の円形で、黒色を呈している。表面中央部に浅い凹みがある。
	6	不明種子5	-	●			長さ 2mm幅 1.5mm程度の円形で、黒色を呈している。表面形態も種子を見し、表面には繊細な粒状がみられる。
	7	不明種子6	-	●			長さ 2.2mm幅 1.2mm程度で半円形で、黒色を呈している。表面中央部には胚乳がはしる。長軸方向に細く明瞭な縦筋が表面にみられる。
SZ 1	8	種子	ブドウ属 エビヅル	●			長さ 6mm幅 1mm程度の球体で、黒色を呈している。表面にしまじ形容の浅い凹みがあり、表面は滑らかで表面形態を呈する。大きさや形態からエビヅルと判断した。
	9	種子	タデ科?	●			長さ 2.6mm幅 1.6mm厚さ 0.5mm程度の菱形で、黒色を呈している。表面は三角形で、表面には繊細な凹みや凹斜面を呈す。
	10	不明種子7	-	●			長さ 2.1mm幅 1.8mm厚さ 0.5mm程度の扁平な凹形で、黒色を呈している。表面には繊細な粒状がみられる。
	11	種子	バラ科 ウメ	●			長さ 3.1mm幅 1.6mm厚さ 0.5mm程度の扁平な凹形で、黒色を呈している。表面には繊細な粒状がみられる。
	12	不明種子8	-	●			長さ 3.5mm幅 1.6mm厚さ 1mm程度の半円形で、黄褐色を呈している。表面にシワが多くみられる。表面には主に種子の形態を呈する。小凹点が分布している。やや小ぶりではあるが形態からウメと判断した。
	13	種子	シソ科 キランソウ	●			長さ 2.3mm幅 1.6mm厚さ 1mm程度の扁平な凹形で、黄褐色を呈している。表面には多くのシワがあり、表面にはリザン状の形態がみられる。色調、大きさ、胚乳からキランソウと判断した。
	14	種子	スギ科 スギ	●			長さ 2.6mm幅 2mm厚さ 1mm程度の扁平な凹形で、暗褐色を呈している。表面は滑らかで中央部から凹む。光沢はない。大きさ、形態、色調からスギと判断した。
SF 1	15	種子	トウダイグサ科 アカメガシワ?	●			長さ 2.6mm幅 1.6mm厚さ 1mm程度の円形で、黒色を呈している。表面には多くのシワがあり、表面には主に種子の形態を呈する。小凹点が分布している。やや小ぶりではあるが形態からアカメガシワと判断した。
	16	離しへ	スギ科 スギ	●			長さ 2 mm幅 1 mm程度のラグビーボール形で、黒色を呈している。表面に尖端がみられる。色調と形態からスギの離しへと判断した。
	17	種子	カヤツリグサ科	●			長さ 2.6mm幅 1.6mm厚さ 1mm程度の球形で、褐色を呈している。表面は滑らかで光沢はない。下部には滑らかな状況化粧がみられる。形態、状況化粧片からカヤツリグサ科と判断した。フジノカヤツリグサの可能性が高い。
		スギの葉	-	●			多數みられ、葉脈により大きさは千差万別である。葉が針状に尖り、株全体としては一面に上向きの形を呈するようである。
	9	種子	タデ科?	●			↑同じ
	14	種子	スギ科 スギ	●			↑同じ
	18	種子	カヤ科?	●			長さ 7mm幅 6.1mm厚さ 0.5mm程度の扁平なラグビーボール形で、黒色を呈している。表面には滑らかで光沢は弱い。
SF 5	19	不明種子10	-	●			長さ 5 mm幅 1.9mm厚さ 0.5mm程度の扁平な球形で、灰褐色を呈している。表面は滑らかで、縁に深い溝があらわれる。
	20	不明種子11	-	●			長さ 1.5mm幅 1.1mm厚さ 1.4mm程度の円形で、灰褐色を呈している。やや大きめの不定型な球をなす形態がみられる。
		アナ科の葉	-	●			多數みられ、葉脈により大きさは千差万別である。先端が突り上半部分に網目がみられる。表面に微少な毛がみられる(イライガシ)。
	14	種子	スギ科 スギ	●			↑同じ
	16	木の芽	-	●			↑同じ
	21	木の芽?	-	●			長さ 7 mm幅 2.2mm程度の棒状で、黒色を呈している。突起が多數みられる。
	22	不明種子12	-	●			長さ・幅 9 mm程度の球体で、黒色を呈している。種子中央部には短い突起がみられる。
SF 5	23	不明種子13	-	●			長さ・幅 9 mm程度の球体で、黒色を呈している。下部には複数部分がみられる。
	24	種子	ブナ科 コナラ亜属	●			長さ 1.6mm幅 1.6mm厚さ 1 mm程度の円形で、黒色を呈している。種子の形態や突起、短い突起、長軸方向の浅い窓からコナラ亜属と判断した。欠損が著しいが、クヌギが有力であろう。
	25	種子	ブナ科 アカガシ亜属	●			長さ 17mm幅 10mm程度の円形で、黒色を呈している。純圓形の形態や突起、やや小きのひのきやシラカシの形態からアカガシ亜属と判断した。クヌギが有力であろう。
	26	種子	ヒュ科	●			長さ 1.6mm幅 1.6mm厚さ 1 mm程度の円形で、黒色を呈している。光沢が強く、表面は滑らかである。大きさ、形態、表面にさしの葉の可能性がある。
	27	種子	マメ科 カラスノエンドウ?	●			長さ・幅 9.5mm厚さ 2mm程度の円形で、緑色と褐色の混合色の種皮からカラスノエンドウと判断した。ハソの形態からマメ科と考えられるが、種子の小ささからカラスノエンドウの可能性も考えられる。
	28	種子	タデ科 イスタデ?	●			長さ 2.2mm幅 1.6mm厚さ 1 mm程度の円形で、黒色を呈している。光沢があり、三稜形の形態が特徴的である。色調、形態、大きさからタデ科と判断した。可燃性としてはイスタデがあげられる。
	29	不明種子14	-	●			長さ 4.6mm幅 3mm程度で、透明色を呈している。種子は4角、細かくわざに網目があらわせる。
	30	巻貝	-	●			長さ 7 mm・幅 2 mm程度で、透明色を呈している。種子は4角、細かくわざに網目があらわせる。
		アナ科の葉	-	●			長さ 4 mm程度で、光沢が突り上半部分に網目がみられる。表面に微少な毛がみられる(イライガシ)。

*出土個体数: 多は 10 個以上 中は 9~4 個 小は 3 個以下



曾井第2遺跡出土微細自然遺物(SL1;1~7 SZ1;8~17 SF1;18~21 SF5;22~27)

第V章　まとめ

(1) 古代の遺構・遺物について

古代に比定される周溝状遺構1基がB区から、土師器をはじめとする遺物がA・B区から検出された。

周溝状遺構（SL1）は一辺約3.5mの隅丸方形を呈し、幅約35~75cmの溝がめぐる。このタイプの周溝状遺構は、宮崎県下でも多く検出されているが、弥生時代に属するものが多い。遺跡からは弥生土器が1点出土（第52図-252）しており、弥生時代の可能性もあるが、主体部のような中央部の土壤もなく、溝の下部から古代に比定される土師器が5点出土（第52図-180・181）したことから古代に属すると判断した。包含層からは古代の土師器片が多数出土した。特にC10とD10グリッドとの中间付近に集中箇所がある（第84図）。集中箇所は堅穴住居跡などの遺構であったと考えられるが、遺構は確認できなかった。この集中箇所は、緩斜面が平坦状に変換する場所であり、水が湧き出す場所の近くでもあることから、祭祀遺構などの可能性もある。出土土師器の中には布痕土器が多数確認された（第87図）。遺跡のある宮崎市周辺は、宮崎県内でも布痕土器が集中して分布する地域のひとつである。布痕土器は、形態にいくつかのパターンがあるものの、口径10~12cm前後、器壁1.0~1.3cm前後、器高9~10cmの逆円錐形を呈し、一定の形態を示す。口唇部はヘラ切りなどによる調整を、外側はナデと指おさえ、内側は布目痕を施す。これらは小田和利氏分類のⅢ d類と考えられ、旧国の大向地方を分布の中心としている（文献①）。布痕土器は、製塙土器もしくは塙の運搬用土器と考えられており、古代官衙や官道の関連を想定させる遺物である。また、本遺跡からは縫織陶器片が1点出土（第85図-253）している。諸説があるが、遺跡は官道ルートの広田～教麻などが近くを通っていた可能性があり、古代の物流や交通上何らかの役割を果たしていたとも考えられる。

(2) 中世の遺構・遺物について

中世に比定される遺構は井戸跡2基・溝状遺構1条が検出された。遺物は磁器（龍泉窯系青磁・白磁・青花）、陶器（備前系・瀬戸美濃系）、土師器が出土した。出土遺物は、いずれも14世紀~16世紀頃と考えられる。遺跡周辺の中世は、曾井城が文献に登場する時期である。延文6 [1361] 年の「土持文書」（文献②）から元和元 [1615] 年の一国一城令による廃城まで文献に登場している。特に「上井覚兼日記」には曾井城に関する記述が多く見られ、天正11 [1583] 年には曾井に市が存在したことが書かれている（文献③、詳細はp5）。この記述は、曾井の市の場所を特定することは不可能であるが、曾井城下付近に町が形成されていたことがうかがえ、遺跡が町の一角を何らかの形で形成していたと推測できる。性格については不明であるが、陶器の出土量に比べて土師器の出土量が少ないと遺跡の性格を考える上でのヒントとなるかもしれない。

①5号井戸跡（S F 5）：S F 5は、4本の隅柱に11本（本来12本あった可能性）の横桟の枠組みに縱板を被せ、さらにその外側にも板材（本報告では「被覆縱板」と呼ぶ）と竹を粘質土と混ぜ合わせて被せている。鐘方正樹氏分類の組立式方形縱板組型のB 2類（薄板横桟留型）に入ると考えられる（文献④）。隅柱と横桟の接合方法は、隅柱に胴穴を穿ち、ほとんどが横桟の両端部を細く胴に加工してはめ込む方法であるが、1か所だけ（pl2：b-g間）が隅柱を1/4程カットして横桟をはめ込む「胴受」の方法を採用している。1か所だけ違う連結方法を採用している理由については不明である。被覆縱板には墨書きが書かれているものが7点確認された（第11・12図-16~22）。文字は、単独でしか判読できないものが多いが、22は「念七佛院 過去七佛」と判読できる。「過去七佛」は釈迦佛と釈迦佛以前の6人の仏を示していると考えられる。20には梵字が書いてあり、一番下の梵字はおそらく阿弥陀如来をさす「キリーク」と考えられる。これらをあわせ考えると、全体像は不明であるが、井戸構築に際しての仏教祭祀的な様相がうかがえる。また、各被覆縱板の下部には数字が書かれている。当初、数字は井戸枠として設置する際に構築順番を示したものと考えていたが、「十一」の20と「八」の22は並んで検出された（巻頭写真5-②）ことから順序を示す可能性は低いと考えられる。井戸枠だけでなく、井戸の掘形も検出された。掘形は、井戸枠より少し大きい径約22~23mの隅丸方形土坑部分と長さ約250cm・幅約50cmの溝状スロープ部分から構成される。溝状スロープ部分は、緩やかに土坑中央部に向かって下り、おそらく作業用の昇降場所と考

えられる。掘形に昇降場を設ける例は、時代が大きく異なるが、京都府芝山遺跡（奈良時代）などで確認されている（文献⑤）。埋土からは木製品9点（第12・13図-23~31）と土師器1点・青磁1点（第13図-32・33）が出土した。23~28は1個体の状態で出土した。28が底板、23~27が側板の一部分となる結構であり、釣瓶桶として利用されていたと考えられる。また、30・31は用途不明の木製品である。両方とも下部には2か所の貫通する長方形の溝穴と上部には貫通しない長方形の溝穴を有する。斜方向の溝穴が貫通しない面は平滑に仕上げられており、意識された外側の面と考えられる。2枚は、構造から釣瓶桶を下ろす滑車の木枠の可能性があるが、合わせた場合、斜方向の溝穴が交叉する反対方向となり、2枚1組となり難いこと等不明な点も多く、用途について断言はできない。32は埋土上部出土の古代の土師器であり、33は埋土下部出土の中世の青磁皿である。2点には時代の開きがあり、時期比定するには充分な出土状況とは言えないが、33が14世紀後半頃と考えると、SF5は14世紀後半かそれ以降と考えられる。滑車や結構を用いた釣瓶の存在は比較的に古い類例となりそうである。

②6号井戸跡（SF6）：SF6はSF5に近く、径約320cmの土坑を掘形とし、土坑中央部に井戸枠をもつ。井戸枠はSF5と構造が類似するが、隅柱4本・横桟1本・縦板1枚で構成されていた。SF5と比べて不完全な構成であり、井戸枠として機能していたとは考えにくい。他の井戸跡のように井戸枠の裏面に付着すると考えられる陸生珪藻や開口部から混入する花粉などが自然化学分析の結果検出されず、井戸として使用されていた可能性は低い。また、使用後の廃絶・枠材の抜き取りであるならば、自然科学分析では他の井戸跡と同じような分析結果が出ることが予測される。しかし、異なる結果が出たということは、推測の域は出ないが製作途中の廃絶、または未使用のまま閉鎖された可能性がある。

③3号溝状遺構（SE3）：SE3はA区とB区の境界付近から検出された。遺構自体に大きな特徴はないが、溝の底部付近から出土した15点の遺物全てが龍泉窯系青磁片である。青磁片は、出土位置が偏らず等間隔に散らされたようであり、接合した結果、完形ではないが4個体分となった。祭祀的というには極論であろうが、何らかの人为的な意図を感じる。時期は、出土青磁が4点とも14世紀後半頃から15世紀代と考えられる。

④六地蔵輪：全体で3基分確認されたが、その塔身部にはいずれも年号が記されてあった。190・191は永正18年[1521]年、192は天文6[1537]年でいずれも16世紀前半である。現在確認されている県内最古の六地蔵輪は清武町船引にある應永8[1401]年のものとされている（文献⑥）。『六地蔵輪の研究』（文献⑦）、「日向ノ金石文」（文献⑧）などから集成を行うと、宮崎県下では、永正16[1519]年頃から天正18[1590]年頃にかけて50基以上の六地蔵輪が確認され、16世紀代に非常に集中する傾向があり、動乱の社会を背景とした六地蔵信仰の盛行状況がうかがえる。近くの伊満福寺にも永正18年の記年がある六地蔵輪が存在する。この伊満福寺の六地蔵輪と190・191は造りが酷似しており、同一工工等関連があるものと思われる。また、191の塔身部に記されている文字には「曾井城」の記述がある。一部判読できないものもあるが、曾井城及び城下に住む者の幸せを願わんとするような言葉が記されているようであり、城の存在もさることながら、城下の存在をも示す資料となる。

註11：『清武町史』には「應永八年」と書かれているが、現在判読できず確認できない。県内で確認されている他の古い六地蔵輪の例とは100年以上の時間差があり、検討の余地も残されている。

（3）中世後半～近世初頭頃の遺構について

時期を特定できないが、中世後半から近世初頭にかけての遺構群がB区で検出された。

①B区の掘立柱建物跡と溝状遺構：B区検出の掘立柱建物跡3棟（SB6～8）と溝状遺構（SE4～6, 11・12）は若干の時期差をもつが、近い時期に形成された遺構群である。SB6～8の3棟は、柱穴の切り合いや身舎部分に著しい重複があり、同時期に存在していたとは考えられないが、近い時期の建替えが連想される。3棟の中でもSB6が一番早い時期と考えられ、SE4～6と同時期に形成された可能性がある。遺構群は「コ」字状の溝状遺構に囲まれた1棟の掘立柱建物であると考えられるが、周間に他の遺構は確認されず独立した印象をうける。遺構の時期は不明であるが、SE4出土遺物が回転糸切り底の土師器片2点（第57図-182・183）であること、SE4を切る形で検出されたSE12の遺物が17世紀前半頃に属する（第57図-184～189）ものが下限であることから、中世後半から近世前半にかけての遺構と

考えられる。B区は、A区を中心とする中世後半の時期には重複するが、A区で確認される近世期（18～19世紀頃）の遺構・遺物は少なく、古代、中世後半～近世初頭頃にのみ存在する場所である。

（4）近世の遺構・遺物について

①掘立柱建物跡をはじめとする遺構群：A区中央部から掘立柱建物跡5棟・柵列・池状遺構・門跡と考えられる土坑・石列・溝状遺構・井戸跡が確認された（第6図）。これらはほとんど切り合うことなく配置され、ほぼ同時期に存在していたと考えられる。S B 1～4・柵列A～C・石列・池状遺構（S Z 1）・門跡と考えられる土坑（S C 1・2）・溝状遺構（S E 1・8・9・10）は計画的に配されている印象をうける。

S B 1は、S B 2～4と柵列Aに隔てられ、身舎面積が他の面積の約2倍で柱痕跡の径も大きく、大形建物で特別な役割を果たしていたと考えられる。また、S B 4は、他に比べて身舎面積が小さい上に、柱穴間隔や大きさにばらつきがあり、仮設的な印象をもうける。S Z 1は、瓢形の土坑で、層中位から大量の遺物が出土した。出土した遺物は、団化した陶磁器・瓦のほか、石塔片・木製品も多数出土している。木製品は著しく腐食しており、取り上げが困難な状況であったが、現地での確認の結果、加工された建築材のようなものであった。自然科学分析の結果（p12・148・160）を踏まえて考えると、S Z 1は、池として作られた後、池としての役割を終え、湿地となった場所に大量の不要品（陶磁器・瓦・建築材・石塔片など）を投棄した場所と考えられる。投棄物は、建築材の木製品・瓦・生活用品の陶磁器など、屋敷に関する廃棄物の可能性がある。投棄時期は、19世紀の陶磁器を伴うことから、19世紀代～20世紀初頭頃と考えられる。

②1号井戸跡（S F 1）：掘立柱建物群の北隣に位置する。上部は石積、下部は1段の結桶によって井戸枠を形成している。上部の石積は、主に凝灰岩製の扁平な直方体を平面六角形に積んでいる。石積構成の石材には、五輪塔の水輪部や石塔の基壇部らしきものを転用している。下段の結桶は16枚のスギ材で構成され、内6枚の外側に墨書が確認された。墨書には八大龍王が記されており、水神でもある八大龍王の守護を願うことにより、水潤れのない井戸を祈願していたと考えられる。また、墨書には日付と建立者らしき名前が記されており、総合的に判断すると江戸時代末期～明治時代初頭頃の建立と考えられる（p36参照）。八大龍王は法華經に記載されることが多く、D区出土の一宇一石経も法華經関連の「妙法蓮華經陀羅尼品第二十六」の可能性が高い（p122参照）。このことから、江戸時代末期～明治時代初頭頃の遺跡は法華宗系寺院との関わりが想定される。

③・4号井戸跡（S F 3・4）：掘立柱建物群の北東部に2基並ぶように位置する。井戸枠は、S F 3が3段、S F 4が4段の結桶を用いている。両者とも、鐘方正樹氏分類の結桶組型（文献④）であり、近世の代表的な型式である。埋土中の遺物も18～19世紀の陶磁器を含み、その内の1点（第34図-64）がS F 3とS F 4間に接合することなどから、S F 3・S F 4は18～19世紀頃、近い時期の井戸であったと考えられる。両方に廃絶に関わる祭祀跡などは明確に認められなかったが、S F 3は本来上方まであったものを壊した後に板を「×」印に、S F 4は4段目を破壊し大きな石を投げ込んでいるようであり、廃絶行為が認められる。

④石塔群：石塔群は主にC区・D区で確認された。年代の記されているものは、六地蔵輪3点（190・191：永正18[1521]年、192：天文6[1537]年）、板碑2点（200：慶安2[1649]年、589：慶安3[1650]年）、地蔵1点（206：明治2[1869]年）、手水鉢2点（210：明治33[1900]年、211：天保年間[1830～1841]）、無縫塔1点（214：安政4[1857]年）であり、16世紀～19世紀代の石塔が存在する。C区の石塔群は、検出状況から考えて、継続的に形成されたのではなく、ある時期（おそらく明治時代後期頃）に再配置されたものと考えられる。

⑤瓦：遺跡からは、枚数が不明であるが総重量で約250kg分の瓦が出土した。これが一体どれ程の量に相当するのか不明であるが、瓦葺きの建物があったことは推定できる。また、瓦を観察すると、印刻が3種類確認される。最も多い印刻は「城ヶ崎小平次」である。前述したが、遺跡からおよそ3km離れた同じ恒久村内大淀川右岸河口付近に「城ヶ崎町」が存在する。城ヶ崎町は交易の拠点として栄えた場所であり、瓦窯もしくは瓦を扱う店があった可能性も充分にある。また、1点のみ「久島」の銘が入った瓦が出土した（第107図-512）。「久島」銘の瓦は、安永年間[1772～1781年]頃の瓦窯関連遺跡と考えられる日南市楠木原遺跡から多数出土している「久島鷲之介作」銘の瓦と一致すると考えられる。このことから、遺跡で

は江戸時代にすでに瓦葺きの建物が存在したと考えられる。

小結：①～⑤をはじめとする遺構・遺物等から考えると、A区を中心とする近世の遺構群は、近世の屋敷地と判断できる。さらに、石塔群の存在、特に多数の無縫塔（第79図-214、第115～117図）の存在、S F 1の墨書に見られる「當寺十五世」の文字（第29図-52）、画像板碑（第69図-198）の「寺下人」の文字などから判断するとこの屋敷は寺跡もしくは寺院関連の屋敷跡と考えられる。また、地蔵尊に彫られた「瑞雲」（第74図-207）の文字、「日向地誌」の恒久村の記述「瑞雲寺跡 曹洞宗紙肥長持寺ノ末派ナリ曾井城塚ノ西南麓ニアリ明治五年壬申廢ス今宅地トナル」（文献⑨）などから判断すると、この寺は「瑞雲寺」となる。総合的に考えて瑞雲寺である可能性は高いが、「日向地誌」の記述とは同時にいくつかの矛盾が存在する。1つは、曾井第2遺跡が曾井城跡の北北西となり記述の「西南麓」でないこと。もう1つは記述の「曹洞宗紙肥長持寺の末寺」と書いてあるが、S F 1やD区で出土した一字一石経が作られた江戸時代後期頃～明治時代初期頃は法華宗であった可能性があることである。こうした矛盾は、単なる記述の間違いの可能性もあるが、100%瑞雲寺跡と断定できない材料であることも予め断っておく。また、瑞雲寺の存在は、文献でも確認でき、江戸時代の『湯地家文書』「万書」の寛永7[1630]年の検地帳書き写しの中に「瑞雲寺」は20石と書かれている（文献⑩）。

（5）中世から近世にかけての遺跡形成

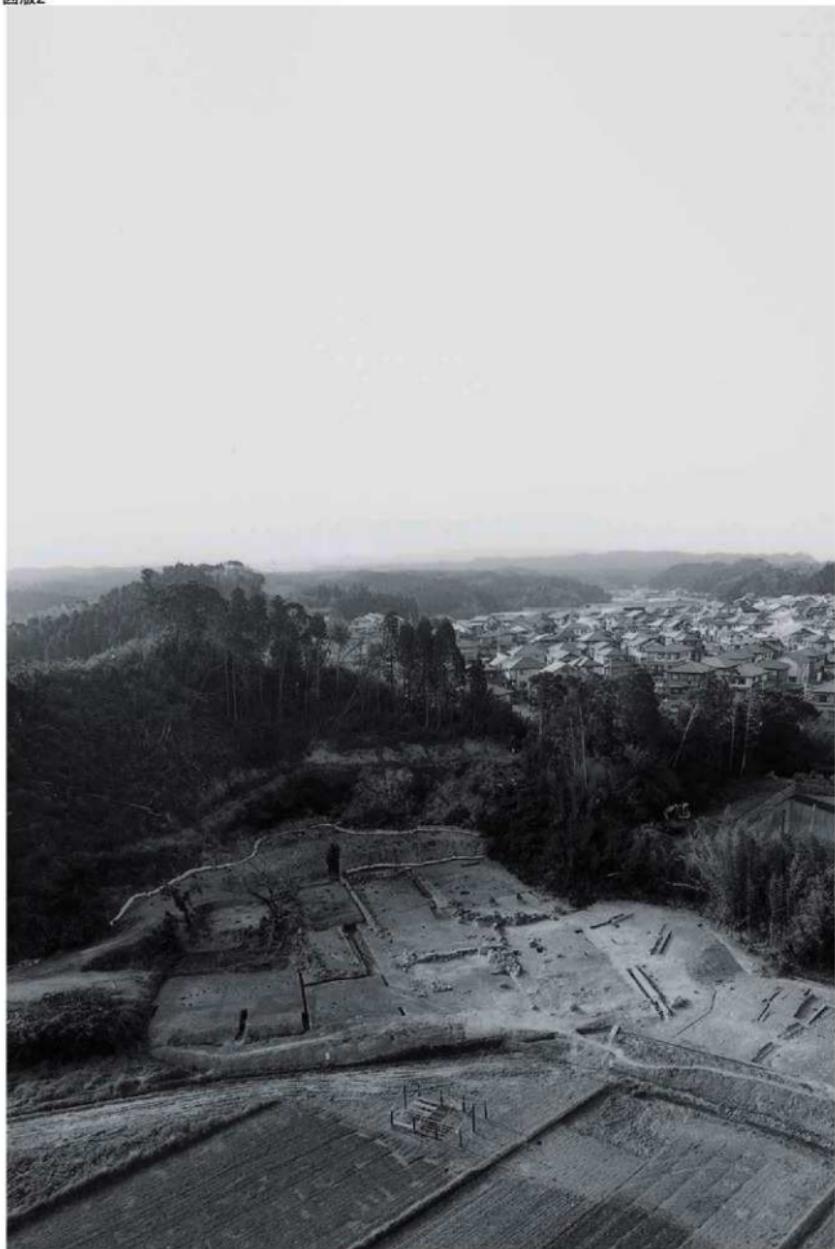
曾井第2遺跡は、古代期（9～10世紀頃）に一度出現した後、14世紀頃までの遺物はほとんど無く、一定の空白期間が存在する。14世紀代から19世紀（一部20世紀初頭を含む）にかけてまで、量の多少がありながらも、ある程度連續した遺物・遺構が確認される。前半期の14世紀～17世紀初頭は、曾井城が1361年〔延文6〕の「土持文書」（文献②）に登場してから16世紀後半の「上井覚兼日記」（文献③）などに記載されている時代であり、隣接する曾井城跡とともに発展してきたと推測される。当該期は、戸井跡（S F 5・6）・溝状遺構（S E 3）といった遺構や陶磁器類・六地蔵輪といった遺物しか年代を特定できず、遺跡の性格は正確にはつかめないが、輸入陶磁器の多さや当時一般的に単独では築けなかったと考えられる戸井跡が存在することなどから、一般的な集落跡とは考えにくく、城と連動した施設であったと考えられる。年代を特定しうる材料の一つでもある六地蔵輪の存在は、現在地にあったとは断定できず、寺院関連遺跡であったと証明することは難しい。しかし、六地蔵輪は寺院関連場所以外に造立されたとは考えられず、遺跡または周辺に寺院関連施設が成立していたことは推定できる。そして、後半期である17世紀中葉以降は、「湯地家文書」（文献⑩）や「日向地誌」（文献⑨）などの文書類や記年された石塔類・陶磁器などの遺物などから、19世紀後半まで継続して瑞雲寺もしくは瑞雲寺関連の屋敷地が営まれていたと考えられる。調査区域から南側におよそ150m離れた民有地では、「瑞雲寺十二世之孫」と「延宝9[1681]年」が書かれた自然石を用いた石塔が確認されている。石塔は遺跡内も含めて移動した可能性があり、石塔の分布域が寺域と一致すると単純に判断できないが、石塔類の広がりから寺域は遺跡周辺におよぶ可能性は大いに考えられる。そして明治5[1872]年には、「日向地誌」の「明治五年壬申廢す」の記述等に書かれた廢仏毀釈によって寺が廢されたと考えられる。このことは、石造物に彫られた仏像の多くの顔部付近が破損していることからも廢仏毀釈が行われたことが推測できる。しかし、明治33[1900]年銘の手水鉢などの存在によって、明治時代のある時期に再興されたと考えられ、この時期あたりにC区の石塔群が形成された可能性がある。ただし、昭和17年の「日向ノ金石文」（文献⑧）において、遺跡の一部に比定される六地蔵輪がある場所を「地蔵堂跡」と書いていることから、御堂だけの無住寺であった可能性が高い。

【引用参考文献】

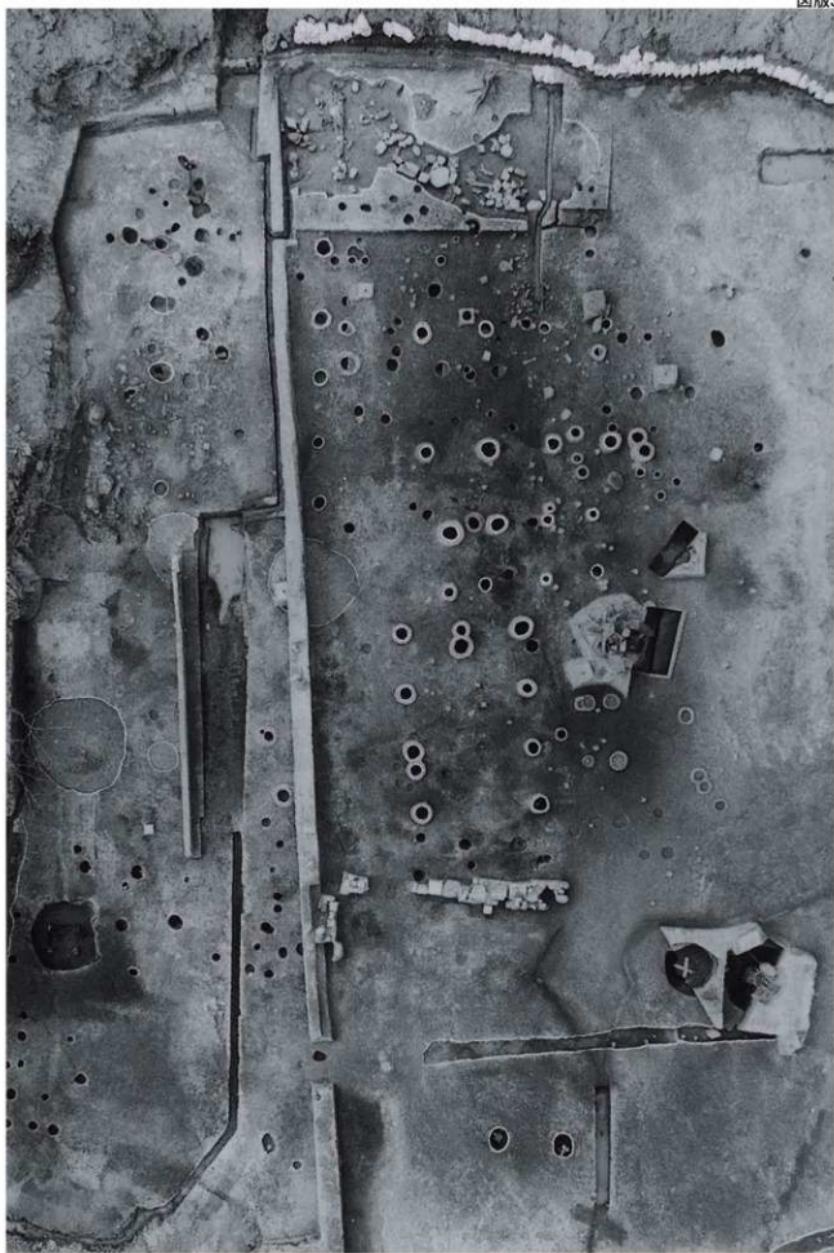
- 文献① 小田和利1996「製塙土器からみた律令制集落の様相」「九州歴史資料館研究論集21」九州歴史資料館
文献② 宮崎県1990「宮崎県史」史料編 中世1
文献③ 東京大学史料編纂所1954「大日本古記録上井覚兼日記(上)」岩波書店
文献④ 鎌方正樹2003「井戸の考古学」同成社
文献⑤ 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987「芝山遺跡」「京都府遺跡調査概報第25冊」
文献⑥ 清武町1960「清武町史」
文献⑦ 齋藤忠2004「六地蔵輪の研究」第1書房
文献⑧ 宮崎県1942「日向ノ金石文」史蹟名勝天然記念物調査報告第十二輯
文献⑨ 平部崎南1884「日向地誌」(青潮社1976復刻版)
文献⑩ 宮崎県1995「宮崎県史」史料編 近世4



曾井第2遺跡全景(1)〈遺跡後方から北方宮崎市街地をのぞむ〉



曾井第2遺跡全景(2)〈遺跡東方から〉



A区検出建物群集中区



曾井第2遺跡全景(3)〈遺跡上方から〉



①1号井戸跡(SF 1)検出状況



②5号井戸跡(SF 5)検出状況(1)



①5号井戸跡(SF5)検出状況(2)〈掘形土坑を含む〉



②5号井戸跡(SF5)検出状況(3)
(被覆木製品除去後の井戸枠)



③5号井戸跡(SF5)検出状況(4)
(被覆木製品と井戸枠)



①石列B検出状況(1)〈南方向から〉



②石列B検出状況(2)〈北方向から〉



③石列B検出状況(3)〈東南方向から〉



④石列B検出状況(4)〈北後方向から〉



⑤石列B土層堆積状況〈南方向から〉



⑥石列D・E検出状況〈東方向から〉



①1号溝状遺構（南方向から）



②3号溝状遺構（北方向から）



③1号土坑（門跡と考えられる土坑）



④2号土坑（門跡と考えられる土坑）



⑤土層堆積状況（A区南方向から）



⑥土層堆積状況（A区南方向から）



①池状遺構(SZ 1)〈池跡と考えられる〉



②1号周溝状遺構(SL 1)〈南方向から〉



①六地蔵幢南幢（東方向から）



②六地蔵幢北幢（東方向から）



③六地蔵幢南幢塔身部(1)「曾井城」の記載)



④六地蔵幢南幢塔身部(2)「水正十八年」の記載)



⑤六地蔵幢南幢笠部（垂木表現）



⑥六地蔵幢中台部（南幢のものと考えられる）



①六地藏幢南幢塔身部(3)〈北面〉



②六地藏幢南幢塔身部(4)〈東面〉



③六地藏幢南幢塔身部(5)〈西面〉



④六地藏幢南幢塔身部(6)〈南面〉



①六地藏幢北幢塔身部(1)〈西面〉



②六地藏幢北幢塔身部(2)〈北面〉



③六地藏幢北幢塔身部(3)〈南面〉



④六地藏幢北幢塔身部(4)〈東面〉



①六地藏幢南幢龕部(1)



②六地藏幢南幢龕部(2)



③六地藏幢南幢龕部(3)



④六地藏幢南幢龕部(4)



⑤六地藏幢南幢龕部(5)



⑥六地藏幢南幢龕部(6)



⑦六地藏幢北幢龕部(1)



⑧六地藏幢北幢龕部(2)



⑨六地藏幢北幢龕部(3)



⑩六地藏幢北幢龕部(4)



⑪六地藏幢北幢龕部(5)



⑫六地藏幢北幢龕部(6)



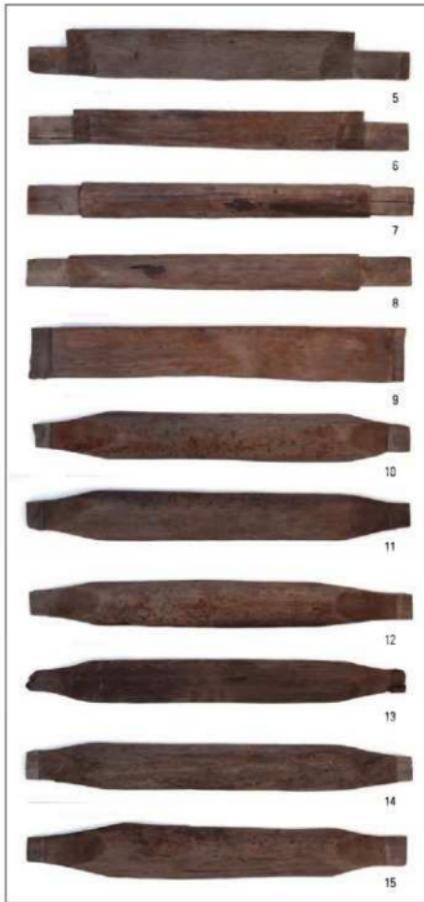
①1号井戸跡(SF 1)井戸枠 〈処理後〉



①号井戸跡(SF 1)井戸枠 (赤外線写真)



①5号井戸跡(SF5)井戸枠隅柱〈処理後〉



②5号井戸跡(SF5)井戸枠横桿部〈処理後〉



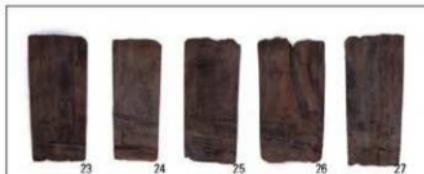
③5号井戸跡(SF5)井戸枠木製品(1)〈処理後〉



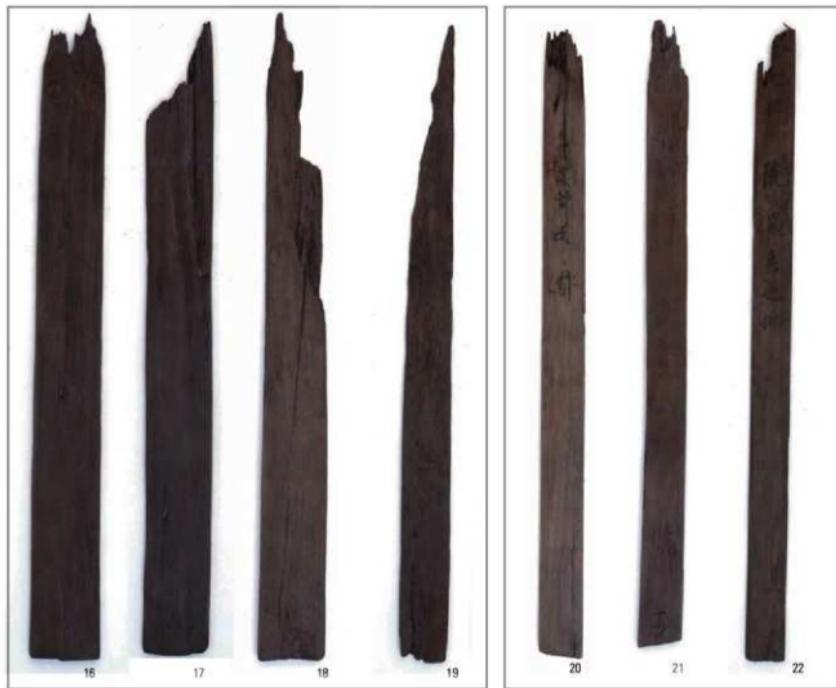
④5号井戸跡(SF5)井戸枠木製品(2)〈処理後〉



⑤5号井戸跡(SF5)井戸枠木製品(3)〈処理後〉

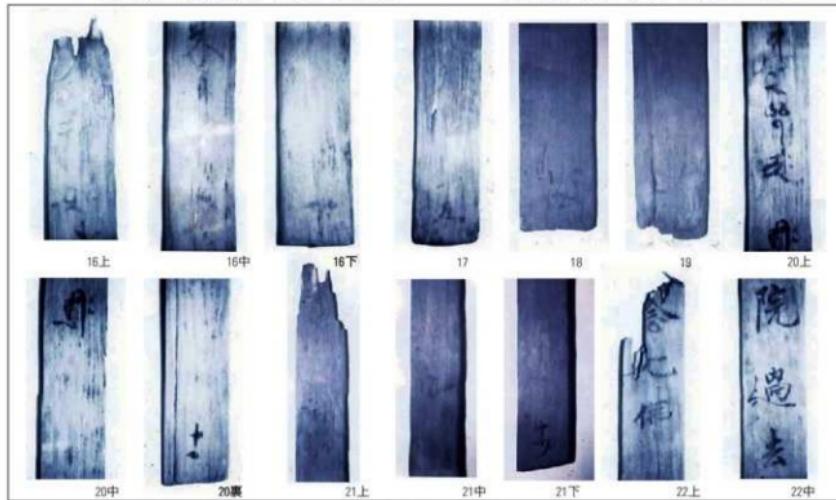


⑥5号井戸跡(SF5)井戸枠木製品(4)〈処理後〉



①5号井戸跡(SF5)井戸枠木枠（処理後）

②5号井戸跡(SF5)井戸枠被覆木製品（処理後）



③5号井戸跡(SF5)井戸枠木枠・被覆木製品（赤外線写真）

图版18



①出土绿釉绿陶器・青磁



①出土瀬戸美濃系陶器・青花染付磁器・初期伊万里系磁器



①出土唐津系陶器



①出土肥前系磁器 (1)



①出土肥前系磁器 (2)



①出土肥前系磁器 (3)



①出土肥前系磁器 (4)・産地不明陶器

図版25



①出土薩摩系陶器・産地不明陶磁器

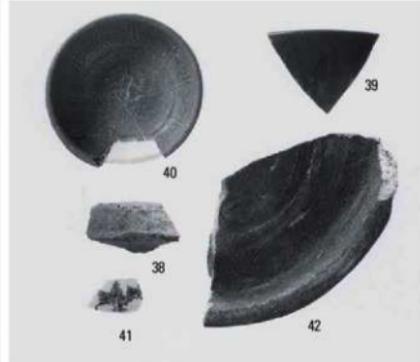


②池状遺構〔SZ1〕出土陶磁器類

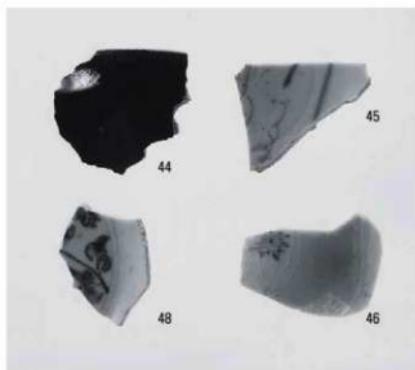
図版26



①SE3出土遺物



②SE1・8・9出土遺物



③石列A出土遺物



④SZ2～5出土遺物



⑤SZ6出土遺物



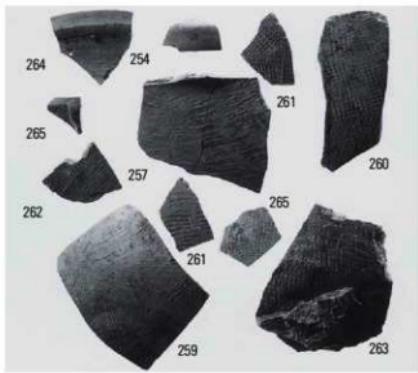
⑥SZ8出土遺物



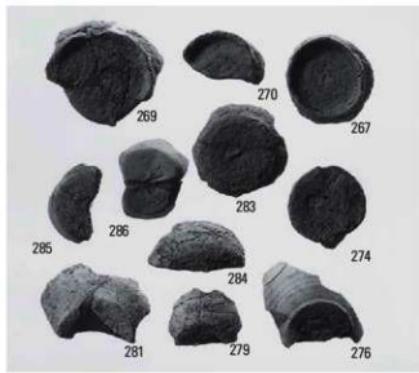
①SL1出土遺物



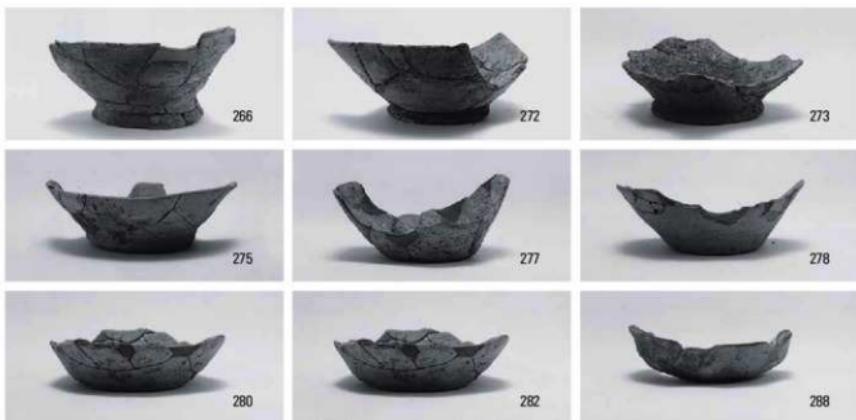
②SE4・12出土遺物



③遺構外出土遺物（1）【須恵器】

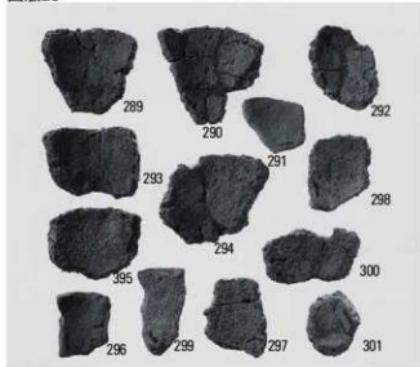


④遺構外出土遺物（2）【土師器】

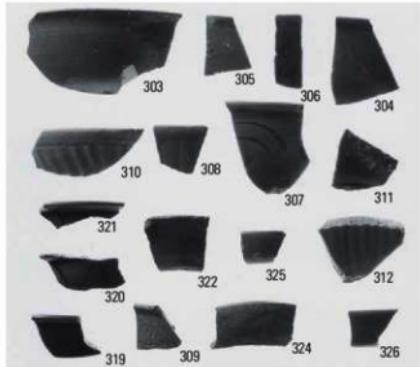


⑤遺構外出土遺物（3）【土師器】

図版28



①遺構外出土遺物 (4) [布痕土器]



②遺構外出土遺物 (5) [青磁-碗・壺]



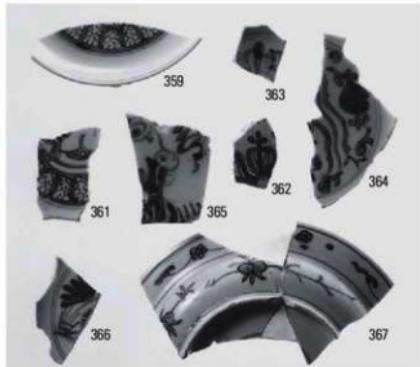
③遺構外出土遺物 (6) [青磁-皿]



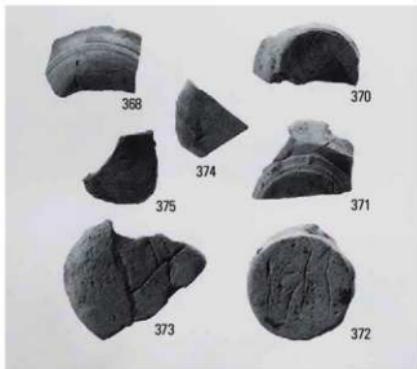
④遺構外出土遺物 (7) [白磁]



⑤遺構外出土遺物 (8) [青花-碗・皿]



⑥遺構外出土遺物 (9) [青花-皿]



①遺構外出土遺物 (10) [土師器]



②遺構外出土遺物 (11) [備前系陶器]



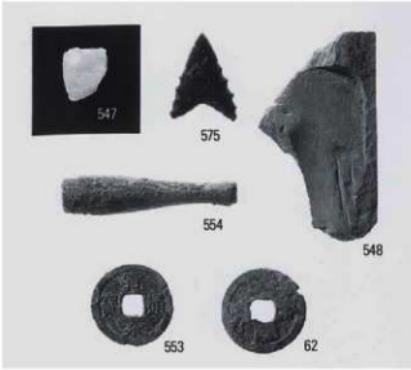
③遺構外出土遺物 (12) [薩摩系陶器]



④遺構外出土遺物 (13) [陶製擂鉢]



⑤遺構外出土遺物 (14) [產地不明陶磁器]



⑥遺構外出土遺物 (15) [石器・硯・煙管・錢貨]

図版30



①遺構外出土遺物 (16) [石器]



②遺構外出土遺物 (17) [石臼]



③遺構外出土遺物 (18) [石臼]



④遺構外出土遺物 (19) [瓦]



⑤遺構外出土遺物 (20) [瓦]



⑥遺構外出土遺物 (21) [瓦]



⑦遺構外出土遺物 (22) [瓦]



①D区石塔群検出状況



②D区石塔片検出状況（1）【竿部】



③D区石塔片検出状況（2）【無縫塔】



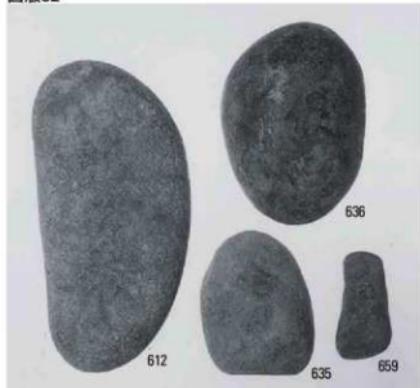
④D区石塔片検出状況（3）【地輪・相輪・板碑】



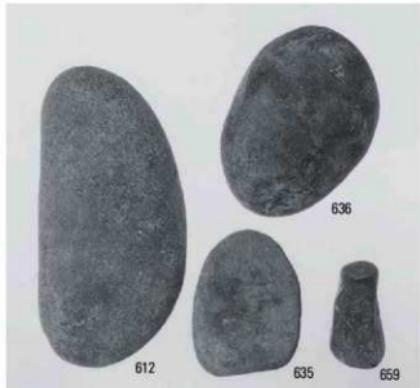
⑤D区石塔片検出状況（4）【墓碑】



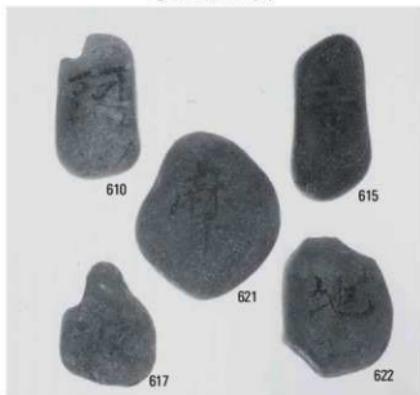
⑥D区経石検出状況



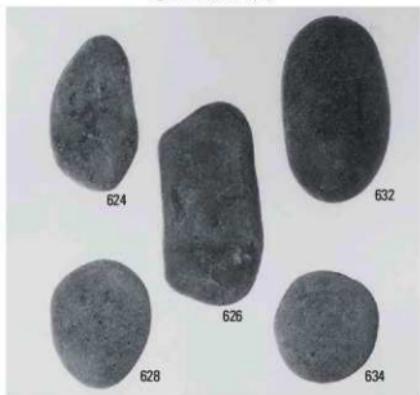
①出土経石 (1)



②出土経石 (2)



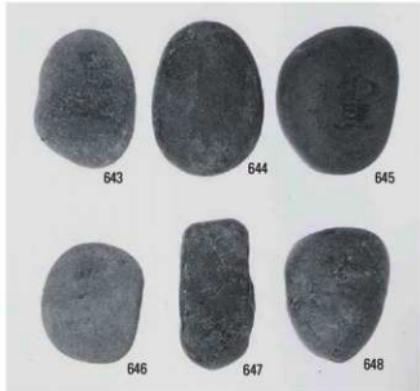
③出土経石 (3)



④出土経石 (4)



⑤出土経石 (5)



⑥出土経石 (6)

報告書抄録

ふりがな	そいだい 2いせき (だいいちじ・にじちょうさ)
書名	曾井第2遺跡（第一・二次調査）
副書名	一般国道269号（加納バイパス）交通円滑化事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第175集
執筆・編集担当者名	甲斐貴充・和田理啓
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター TEL:0985-36-1171
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
発行年月日	西暦2008年3月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すいだいこうせき 曾井第2遺跡 (第一・二次調査)	みや さとう し おおあざ 宮崎市大字曾井 恒久字曾井 5549番地口	45201	-	31° 53' 24"	131° 24' 11"	(一次) 2005.8.17~ 2006.3.6 (二次) 2007.5.24~ 2007.6.29 (世界測地系)	(一 次) 4,300m ² (二 次) 100m ²	一般国道269号(加納バイパス)交通円滑化事業に伴う事前調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
散布地	縄文・弥生・古墳時代			石器・弥生土器・須恵器				
	古代	周溝状遺構1基		土師器・須恵器・布痕土器・綠釉陶器				
	中世～近世	掘立柱建物跡8 井戸跡6 溝状遺構12 池状遺構1 石列 土坑 石塔群		陶磁器(青磁・白磁・青花・肥前系染付・瀬戸美濃系・志野・備前系・常滑・薩摩系・等 系など)・絆石・瓦・瓦質土器・石器(臼・砥石・火打石など)・木製品(井戸枠・釣瓶など)・錢貨・煙管・石塔(五輪塔片・板碑・六地蔵碑・手洗鉢・絆碑・地蔵・無縫塔)				

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第175集

曾井第2遺跡（第一・二次調査）

一般国道269号（加納バイパス）交通円滑化事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年3月26日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

電話 0985(36)1171

印刷 北一株式会社

〒880-0903 宮崎市太田3-1-31

電話 0985(51)5100
